

# 令和7年 春季俳句講座

「第一句集を読む―師系を超えて(8)」

## 第3回 中村 雅樹

『砲車』 長谷川素逝

### 「抒情の行方」

素逝の俳句を貫く抒情。その抒情は日中戦争下

の国民感情と一つになって、『砲車』を生み出した。

『砲車』の栄光と戦後の素逝の苦悩に迫りたい。

# 中村雅樹 プロフィール

昭和二十三年 広島県に生まれる

昭和六十二年 宇佐美魚目に師事、「晨」入会

平成二年 「晨」同人

平成十一年 大串章に師事、「百鳥」入会

平成十二年 「百鳥賞」受賞、「百鳥」同人

平成十六年 「鳳声賞」(百鳥同人賞)受賞

平成二十年 『俳人宇佐美魚目』にて第九回山本健吉

文学賞

平成二十四年 『俳人橋本鶏二』にて第二十七回俳人協会

評論賞

平成三十年 「百鳥」退会

令和元年 「晨」代表

## 著書

句集 『果断』(平成九年)、『解纜』(平成十九年)、

『晨風』(令和四年)

『中村雅樹集』(令和六年)

評論 『俳人宇佐美魚目』(平成二十年)、

『俳人橋本鶏二』(平成二十四年)

『ホトトギスの俳人たち』(平成二十九年)、

『橋本鶏二の百句』(令和二年)

公益社団法人俳人協会評議員

日本文藝家協会会員

# 長谷川素逝——抒情の行方——

中村雅樹

## 一、短い生涯



素逝夫妻

出生地はこれまで大阪と考えられていたが、津である可能性もある。

「素逝」という俳号は『莊子』からとった。

それ王徳の人は、逝くに素にして、

而して事において通ずるを恥とし……

一生そのものが「逝くに素にして」という一生であった。

# 長谷川素逝・略年譜

『長谷川素逝 圓光の生涯』（うさみとしお）を参考にして作成

明治四〇年（一九〇七）

二月二日、大阪あるいは津に生まれる。本名、直次郎

大正一三年（一九二四）

十七歳  
津中学校を卒業、第三高等学校入学

昭和三年（一九二八）

二十歳  
京都帝国大学に入学  
「ホトトギス」雑誌、初入選

昭和八年（一九三三）

二十五歳  
『京大俳句』創刊、編集同人として参加

昭和九年（一九三四）

二十六歳  
津中学に国語教師として赴任

昭和一一年（一九三六）

二十九歳  
『京大俳句』を退会  
盧溝橋事件、日中戦争勃発

昭和一二年（一九三七）

三十歳  
応召、京都の伏見野砲第二二連隊へ入隊  
中国に上陸、石家荘、無錫を経て、

南京入城

昭和一三年（一九三八）

三十一歳  
北支転進、山西討伐、徐州陥落  
青島の陸軍病院に入院、内地送還

昭和一四年（一九三九）

三十二歳  
「ホトトギス」同人  
『砲車』（三省堂）刊行

昭和一五年（一九四〇）

三十三歳  
甲南高等学校の教授として赴任

昭和二〇年（一九四五）

三十八歳  
空襲により津の実家及び神戸の住居全焼

敗戦  
十二月、「根倉句抄」を書き始める

昭和二二年（一九四六）

三十九歳  
二月二十日  
〈弟を返せ 月をにのろふ〉（「根倉句抄」）

国立三重療養所へ入院

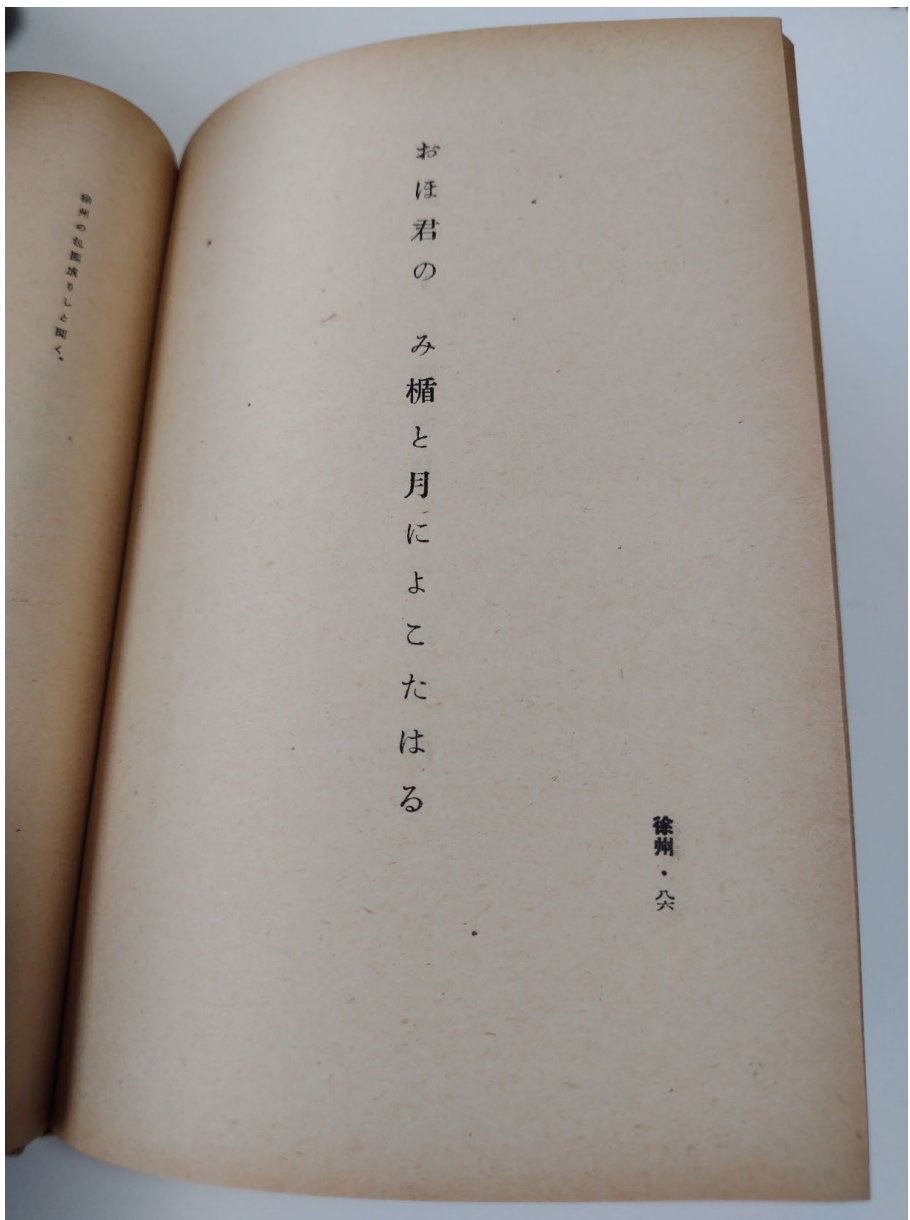
十月十日 逝去

二、『砲車』（昭和十四年）

徴兵制のもと、男子の義務として肅々として戦場に赴く。  
戦場における「何かに表現せずにはをれないといふ大きな  
衝動の重み」を感じて詠んだ句。



砲車



おほ君のみ楯と月によこたはる

徐州・六

(一) 戦場の様子を詠んだ句

夏灼くる砲車とともにわれこそ征け  
頑軀汗すこやかあだをうたでやまじ  
わが馬をうづむと兵ら枯野掘る  
稲の山にひそめるを刀でひき出だす  
寒夜くらしたたかひすみていのちありぬ  
かかれゆく担架外套の肩章は大尉  
雪の上にはものごとく屠りたり  
みいくさは酷寒の野をおほひ征く  
馬ゆかず雪はおもてをたたくなり  
雪の上にうつぶす敵屍銅貨散り  
向日葵畑ぶすとたま来て土けむり  
おほ君の み楯と月によこたはる  
すべる砲車を裸身ささふる汗を見よ  
かをりやんの葉もて担架の顔を覆ふ  
てむかひしゆえ炎天に撲ちたふされ  
汗と泥にまみれ敵意の目を伏せず

戦火想望俳句 日野草城の場合

爆撃機爆弾を孕めり重く飛ぶ

青麦原逆光に戦車隊来る

隊長の亡骸を負ひて占拠の万歳

工兵の人柱ごときかれても立つ

## (二) 民衆に対する憐憫の情

いくさゆゑうゑたるものら枯野ゆく  
 酷寒は家なきものらにも来たる  
 あはれ民 凍てしいひさへ掌に受くる  
 食を乞ふ少年あばら骨さむく  
 うれしまま戦禍の麦のくたるなり  
 氾濫の黄河の民の粟しづむ  
 氾濫のともしき穂麦干して食ふ

## 三 抒情的俳句

さよならと梅雨の車窓に指で書く  
 風呂を出たばかりの顔で夕焼けて  
 かさといふくぬぎ落葉に山日和  
 どんとうつおぼろの濤の遠くだま  
 梅林のなかおのづから谷をなし  
 山の子にけふが暮れゆく獅子の笛  
 ふりむけば障子の棧に夜の深さ  
 暖かき雨のにほひの夜氣にふれ

## 素逝の抒情の本質

村は私の心を何かしらやるせないまでのあたたかさでくるんでくれ心やすめてくれた。村の全てのくらしが土と季節にながつてゐる為の その土や季節のあたたかさなのであらう。

(『村』昭和二十一年の序文より)

俳句は俳諧は、日本人の生んだ詩の一つである。「中略」俳句には、日本人の日本人たる無垢の精神が流れてきてゐる。「中略」今こそ、俳諧の伝統の中に省みて、悠久たるかなた、あるひは万葉にうけつがれ、やがては俳諧にうけつがれて来たこの流れを、確かに正しく身にせねばならぬといふのである。（『俳句誕生』、昭和十八年より）

暮しが土と季節に繋がっている村の生活とそこに育まれる精神は、日本人の日本人たる無垢の精神でもあり、万葉に受け継がれ、現代の俳句にまで受け継がれてきた日本の魂である。

素逝の抒情は、村の生活において育まれたなつかしさを伴う抒情であり、他方では、それは万葉の時代において「海ゆかば瀆くかばね、陸ゆかばくさむすかばね」とうたわれた大君をたたえる精神と同根であった。



#### 四、戦後の素逝

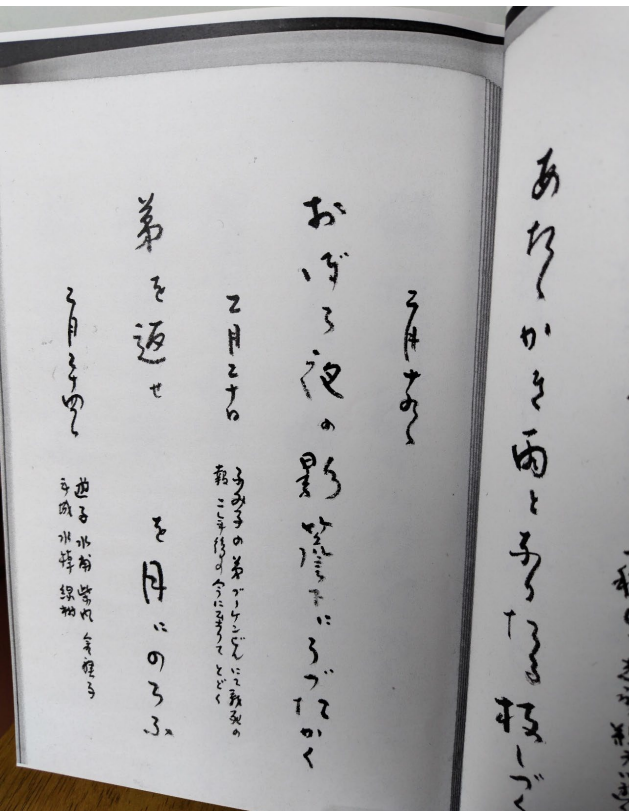
終戦直前まで「前線俳句鑑賞」を執筆。素逝は敗戦に至るまで、俳句を通してお国に奉公する、という気持ちを捨ててはいなかった。

玉音放送を聞き、「陛下に申し訳ない」と涙。

二十年十二月から「根倉句抄」を書き続ける。

二十一年二月二十日

弟を返せ　を月にのろふ



#### 「根倉句抄」

しづかなるいちにちなりし障子かな

圓光を著て鴛鴦の目をつむり

水玉とあそべる鴛鴦のひかりかな

あたたかき雨となりたる枝しづく

芽ぶかんとするしづけさに太き幹

さんしゆゆの花のごまかさ相ふれず

家のないこと

酷寒は家なきものらにも来たる(『砲車』)

「家のないといふことが、どんなに心身にこたへるものであるかといふことは、恐らくさういふ苦しみを身にしている人ではないとわからないことなのであらう。」

(『週刊朝日』、昭和二十一年六月)

終戦後、ある人への手紙

「私たちは戦争という罪悪に加担してきました。これも他人が宮々と築いてきた宝物を、手段も選ばずに横取りしようとする醜い心の表れではないでしょうか。そのために幾多の人々の血を流し、命を奪ってきました。今、私はこの罪深い行為を振り返って、心から恥かしく思っています。」

(『おやじの値段』、文春文庫)

十月十日 逝去

まつしぐら爐にとびこみし如くなり 虚子

# 令和7年 春季俳句講座

「第一句集を読む―師系を超えて(8)」

◆ 第1回講師 ― 山西 雅子

動画配信日 4月15日(火)

◆ 第2回講師 ― 森賀 まり

動画配信日 4月22日(火)

◆ 第3回講師 ― 中村 雅樹

動画配信日 4月29日(火)

◆ 第4回講師 ― 横澤 放川

動画配信日 5月6日(火)